

松井田町文化財調査報告書第1集

# 入 山 峠

東京電力鉄塔改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘確認調査報告書

1986

松井田町教育委員会

# 例 言

☆ 本書は東京電力株式会社の軽磯線No.7～No.22鉄塔改良工事に伴う、鉄塔No.10・群馬県碓氷郡松井田町大字入山上ノ原1027番1の発掘調査報告書である。

☆ 調査にかかわる一切の費用は東京電力株式会社が負担した。

☆ 調査は松井田町教育委員会により実施した。

事 務 局 松井田町教育委員会社会教育課

調査担当 水澤祝彦

調 査 員 高橋信秀

☆ 調査は1985年12月16日から同26日の期間で行った。

☆ 本書の編集は水澤が担当し、執筆は水澤、田口修、高橋が行ない、文末に文責を記し、記名の無いものは水澤が行なった。

☆ 実測・トレースは次のとおりである。

遺物実測 水澤・田口

トレース 高橋（遺構） 田口（遺物）

☆ 遺物実測図について、須恵器は1：3、石製模造品は1：1とした。

☆ 調査および報告書作成にあたり、遺物の実見、石材鑑定等については、群馬県立歴史博物館ならび同館学芸員中束耕志・田中宏之両氏から御指導、御協力をいただいた。

また佐藤要作・佐藤菊雄・佐藤熊太郎各氏の御厚志により表採遺物の掲載をさせていただいた。

さらに、多大なる御指導、御協力をいただいた各氏および関係各機関に対し、記して感謝の意を表したい。（敬称略）

飯島康夫・上原富次・小板橋典義・小林二三雄・田口一郎・藤森諒治・綿田弘実・渡辺重義・東京電力株式会社千曲川電力所・国土計画株式会社・日本道路公団東京第2管理局碓氷バイパス管理事務所・関東電工株式会社・群馬県教育委員会文化財保護課・軽井沢町教育委員会・松井田町森林組合・松井田町役場建設課

## 目 次

I 調査に至る経過	1
II 調査の方法と経過	1
III 土層状況	3
IV 位置と環境	4
V 入山峠祭祀遺跡表採遺物	6
VI ま と め	10

## I 調査に至る経過

近年、関越自動車道・上越新幹線・土地改良事業等の開発が県内各地で展開され、これに伴ない毎年数多くの発掘調査が行われている。このような状況下、松井田町においても昭和59年度によく埋蔵文化財の発掘調査開始の体制に至り、入山峠の調査で4ヶ所めとなる。

東京電力株式会社千曲川電力所より、鉄塔改良工事として送電鉄塔移動計画の報告があり、その建設場所についての説明とともに埋蔵文化財の保護対策についての申入れを受けた。これに対して該当地は周知の遺跡である入山峠祭祀遺跡の推定範囲に近く、確認調査が必要である旨を示した。そして協議の結果工事の原因者である東京電力が町教育委員会に発掘調査を委託することとなった。

これに伴ない、土地所有者である国土計画より発掘調査の承諾を得、更に該当地が保安林であるため高崎林業事務所より掘削作業許可を受け調査に臨んだ。

## II 調査の方法と経過

### 1. 調査の方法

調査は、鉄塔建設により破壊される部分、基壇四基を含む区域 100㎡ を対象とし、グリット調査の方法を採った。調査区は建設用の中心杭を基準として、鉄塔脚方位に合わせ一辺を10m で設定し、さらに全体を一辺2m のグリットで区分した。グリットは(X-Y) で呼称し北西の角を(10-10)として、チドリ状に発掘し、作業は終始手掘りで行った。(図-1)

### 2. 調査の経過

調査は、杭打ち、調査区設定等の準備を含み、1985年12月16日より開始され、同月26日に終了した調査区域は標高1,030m 代の山林内に在り、しかも冬季施行のため調査の全期間を通して作業は、寒気と凍土との闘いの中で進められたといっても過言ではない。発掘作業は調査区全面を覆う雪・枯葉・枯枝等の排除から始まり、表土・軽石層の除去と続き、発掘調査前段階において二つの報文(山崎義男1957・椋山林継ほか1983)を参考に検討し、遺構・遺物包含層と推定した黒色土層に到

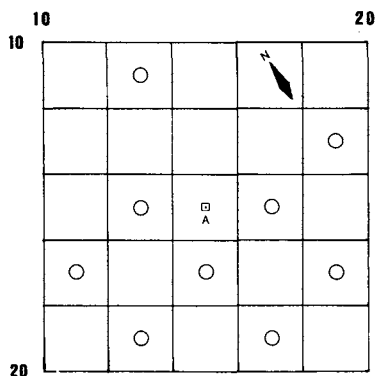


図-1 グリット図

作業	月日 12											
	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	
準備	○	○										
発掘			○	○	○	○		○	○			
記録			○		○			○	○	○	○	

表-1 行程表

達した。これより前にも増して、より一層慎重に調査を行ったが、残念ながらいかなる遺構、遺物も検出しえなかった。

以後、推定した包含層より下位の遺構・遺物の確認のため、設定し既に掘削した2mグリットのうち数カ所を選出し、ローム層面まで掘り下げたが、ここでも遺構・遺物の発見は成されなかった。以上をもって発掘作業を終了し、残りの期日は記録作業にあてた。

調査の概要は、以下日誌抄を参照されたい。

### 3. 日誌抄

- |  |  |
|--|--|
| 12月16日（月）晴れ、杭打ち、調査区設定。   | 12月23日（月）晴れのち曇り、地形平板実測（縮尺 $\frac{1}{60}$ ）。発掘作業10-16・18-12                     |
| 12月18日（水）晴れ、調査前全体写真撮影。<br>発掘作業開始12-18・16-18・10-16。                         | 12-10終了。12-14。   |
| 12月19日（木）晴れ、道路公団碓氷バイパス事務所へ標高基準点を教示願う。発掘作業12-18・16-18・10-16。                | 12月24日（火）晴れ、霜とり作業。セクション切り。写真撮影。発掘作業全課程終了。                                      |
| 12月20日（金）晴れ、調査区内等高線実測。発掘作業12-18・10-16・14-16終了。<br>16-18・18-16・16-14・18-12。 | 12月25日（水）晴れ、セクション実測10-16東面、18-12東面、12-10東、南面。                                  |
| 12月21日（土）晴れ、発掘作業18-16・16-14終了。18-12。                                       | 12月26日（木）曇りのち晴れ、セクション実測16-18北・東面。セクション写真接写18-12。調査区域掘りあがり全体写真撮影。発掘調査全課程終了。（高橋） |

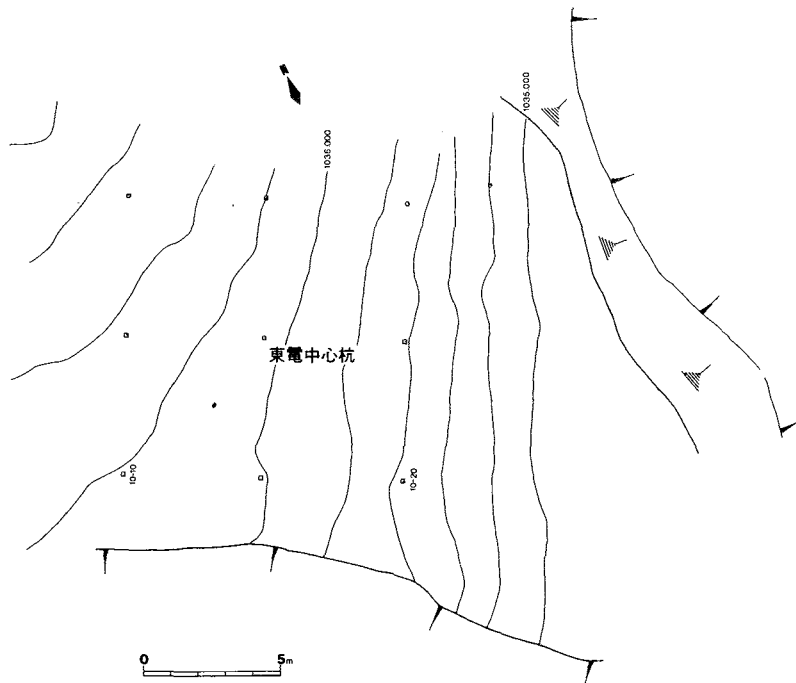
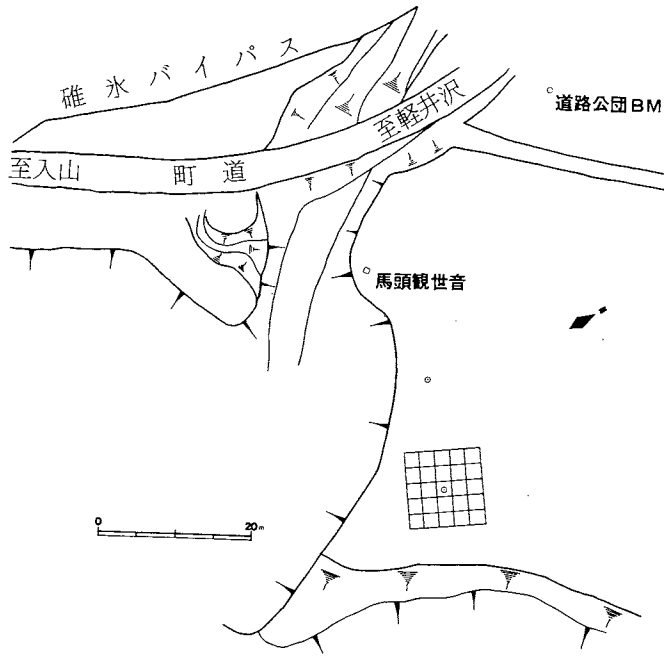
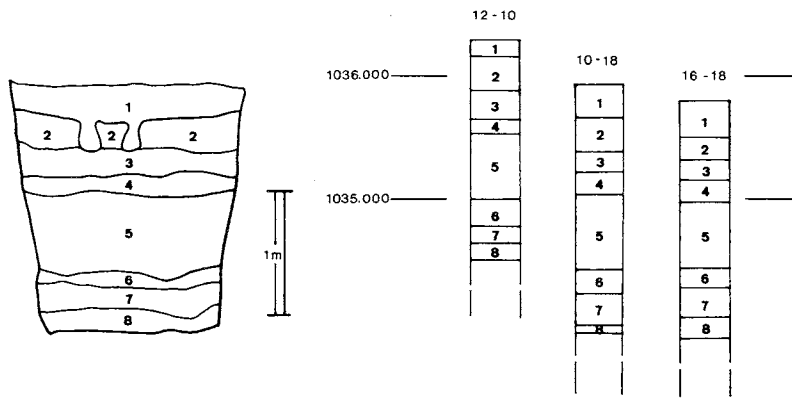


図-2 地形図



図一 3 遺跡附近実測図

### Ⅲ 土層状況



図一 4 土層状況図

- |            |                               |
|------------|-------------------------------|
| 1. 黒色土層    | 表土                            |
| 2. 暗黄褐色軽石層 |                               |
| 3. 黒色粘質土層  | 水分が多い。遺物包含層と推定した。             |
| 4. 黄褐色土層   | 黄色パミス粒を含む。                    |
| 5. 黒色土層    | 黄色パミス粒を多量に含む。                 |
| 6. 明黒色土層   | 黄色パミス粒を多量に含む。(黄色味を帯びる)        |
| 7. 暗黄色粘質土層 | 黄色パミス(大・小粒)・黒色斑を含む。           |
| 8. 黄褐色粘質土層 | ローム層、上部にパミス(大・小粒)を、下位に礫を包含する。 |

(高橋)

## Ⅳ 位置と環境

入山峠は群馬・長野県境、松井田町の西部山間地に位置する。現在国道18号線碓氷バイパスが通過しており、古代律令体制下の官道である東山道の碓氷峠越えルートに推定されている一つである。

今回の調査地は、峠の山頂部に所在する入山峠祭祀遺跡から古道を挟んで東に約50mの大字入山字上ノ原1027番1の標高1,035mに位置し、古道に沿う形で東南方面にゆるやかな斜面が張り出し、急勾配で下に落ちる。ここから北西15kmには、浅間山の偉容を間近に観察することができる。

遺跡は北の矢ヶ崎山（標高1,184m）と南の潜岩（1,168m）の間の鞍状に低い部分に位置しており、現在町道及び碓氷バイパス建設により古道頂上付近の地形はかなり変更されている。この頂上部を境に、西側の軽井沢方面へは比較的ゆるやかな傾斜をなしているが、東側の松井田方面においては頂上寄りに一部急傾斜を示している。

現在近世以前の主要峠道として、碓氷峠・入山峠・和美峠等が考えられているが、これらの道沿いにおける律令制下の東山道以前を想定させる遺跡・遺物等で確認されているものは少ない。

**仁田・暮井遺跡** 縄文時代中期～晩期を中心とする遺跡で敷石住居址も確認されている。また曽利式土器を出土するなど中部高地との接点としての資料も多く得られている。その他、弥生時代後期の土器、平安時代の住居址等が検出されるなど、この遺跡地利用の継続性をうかがわせる。

（田島桂男 1984・上原富次 1985）

**入山峠祭祀遺跡** 碓氷バイパス等の道路工事のために発掘調査が行なわれ、管玉・白玉・勾玉・有孔円板・剣・刀子等の主に滑石製の模造品や、S字状口縁台付甕を含む土師器類が破碎されたと思われる状況で検出されている。また浅間山の偉容が間近に見られるために、峠の祭祀とともに浅間山をも対象とした祭祀遺跡であるとも考えられており、東山道が入山峠を通過したものと考える論拠の一つとして採りあげられている。（山崎義男 1957・梶山林継ほか1983）

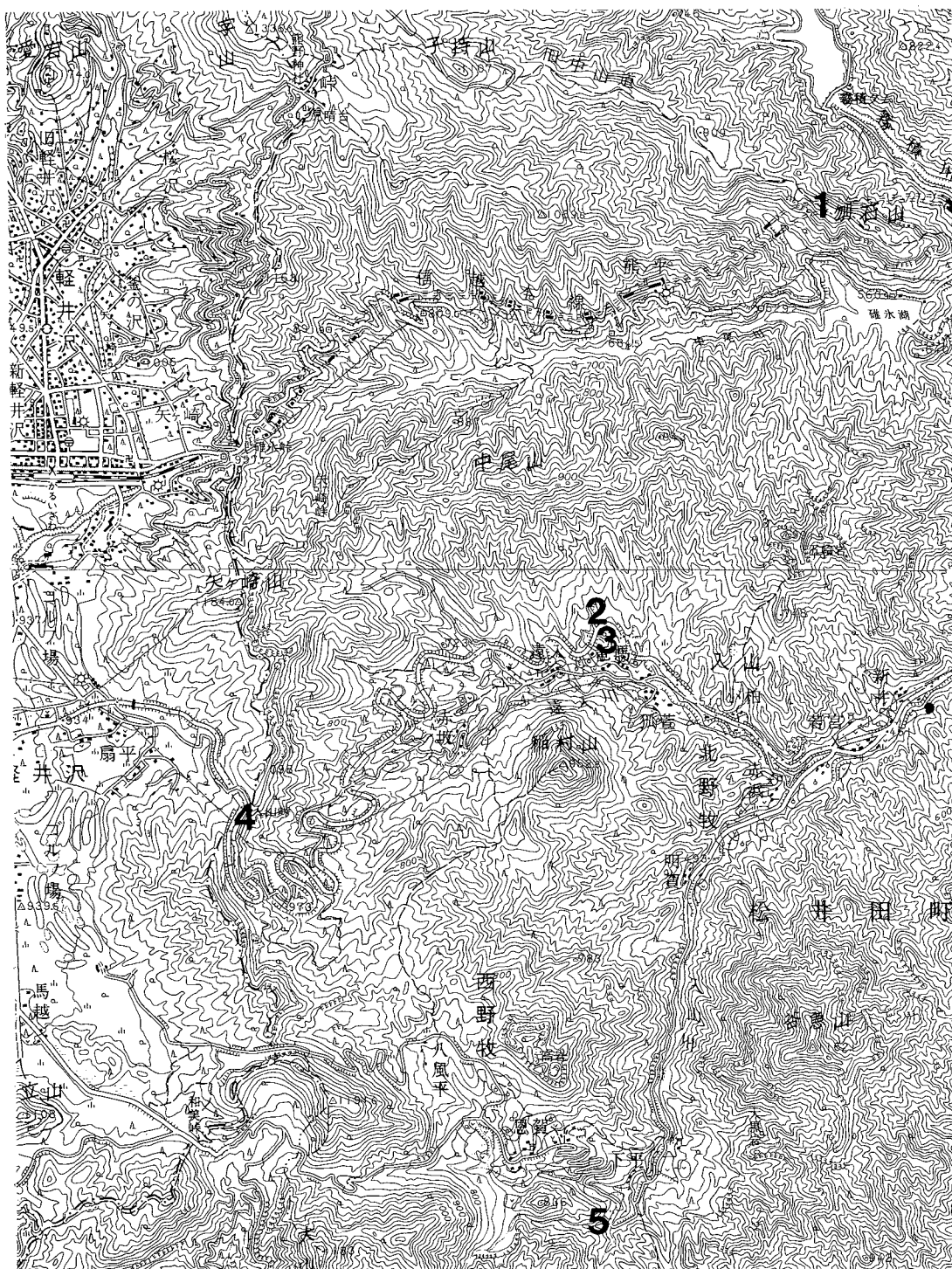
**千駄木遺跡** 県道横川・西野牧線の拡巾工事により掘削される予定であったが、発掘調査の結果、地域における重要な位置を占める遺跡であるとの認識が強くなり保存措置がとられた縄文時代を中心とした岩陰遺跡である。調査の結果、縄文時代前期から晩期（氷式）、弥生時代後期が検出され、更に古墳時代前期の石田川式（S字状口縁台付甕）等も検出されており、各時代における中部高地との交流を考えるうえで重要な位置にある遺跡と考えられる。（松井田町教育委員会1974ほか）

**刎石山** 中山道碓氷峠には近世の所産とされる遺跡が確認されるが、この途中の刎石山の西約600mの尾根上で平安時代のもと思われる須恵器の破片が表採された。<sup>(註1)</sup>これが古代における交通を示すものかどうか、今後の課題としてとらえられる。



図一五 刎石山表採遺物

註1. 1982年に小林二三雄氏により表採され中山道筋を東山道と推定する論拠の一つとして考えられている。灰白色を呈し、砂粒を少量含む、表面はタタキ後、櫛状工具による沈線が走り内面は青海波紋がみられる。全体に雑な感じを受け、焼成もやや不良ぎみである。



图—6 周边图

- |         |            |
|---------|------------|
| 1. 勿石山  | 4. 入山峠祭祀遺跡 |
| 2. 仁田遺跡 | 5. 千駄木遺跡   |
| 3. 暮井遺跡 |            |

## V 入山峠祭祀遺跡表採遺物

今回の調査では、遺構・遺物の確認には至らなかった訳であるが、ここでは、入山峠祭祀遺跡の表採資料として町内に保管されていた石製模造品を紹介することにする。

管玉 (No.1) よく磨かれ光沢を持つ仕上りの完形品で、灰色がかった暗緑色の緑色岩製管玉である。穿孔方向のずれが両面からの穿孔を示している。

刀子 (No.2) 黒緑色を呈す滑石製で、片面穿孔と思われる。裏・表・側面共に斜め方向の擦痕を残す。

剣 (No.3～8) No.3・4は片面に明確な稜を持つ、厚さ7mm程の滑石製品である。No.3は灰色がかった暗緑色の完形品で、滑らかな表面にはやや斜めに擦痕が走る。No.4は黒色で面取りの稜が形成され、斜め方向に明確な擦痕を残す。先端部は欠損している。No.5は材質・色調ともNo.3と非常に似ているが残存状態が悪く、形状等の推定は困難である。厚さ5mmが残っていることから、後述の剣形品ではなく、No.3・4に含めることにした。(以上・ア類)

No.6～8は稜を持たない扁平な剣形品である。No.6は破片であるが、他に比べ巾広で孔は中心よりやや上にある。No.7は無孔・No.8は孔が下半部に位置し、形状はNo.7に近いと思われる。(以上・イ類) これらも総て滑石製で、色調は暗緑色を呈す。

円板 (No.9・10) 暗緑色の滑石製品である。No.9は剝離した破片で、正円を推定した場合の径は5～6cm、孔は認められない。No.10は正円の推定径約2.5cmの双孔円板であり、表面は平滑に磨かれている。

勾玉 (No.11) 淡いコバルトブルーをしたガラス製の勾玉である。C字形の面に浅く広い凹みを施し、逆の面からの穿孔を受ける形をとる。下半欠損部を含めた推定長は1.2cm程度、断面は不整形な隋円で、C字形の面にはかすかな稜が見られる。

白玉 (No.12～42) 玉類の名称については従来の呼称が機械的に継承されており、現代においては実感を伴わない事も指摘されている。また所謂「白玉」についても明確な区分・規定のない現状であるが、ここでは従来の名称を用い、また便宜上3つの形態に区分して述べることにする。<sup>(註1)</sup>

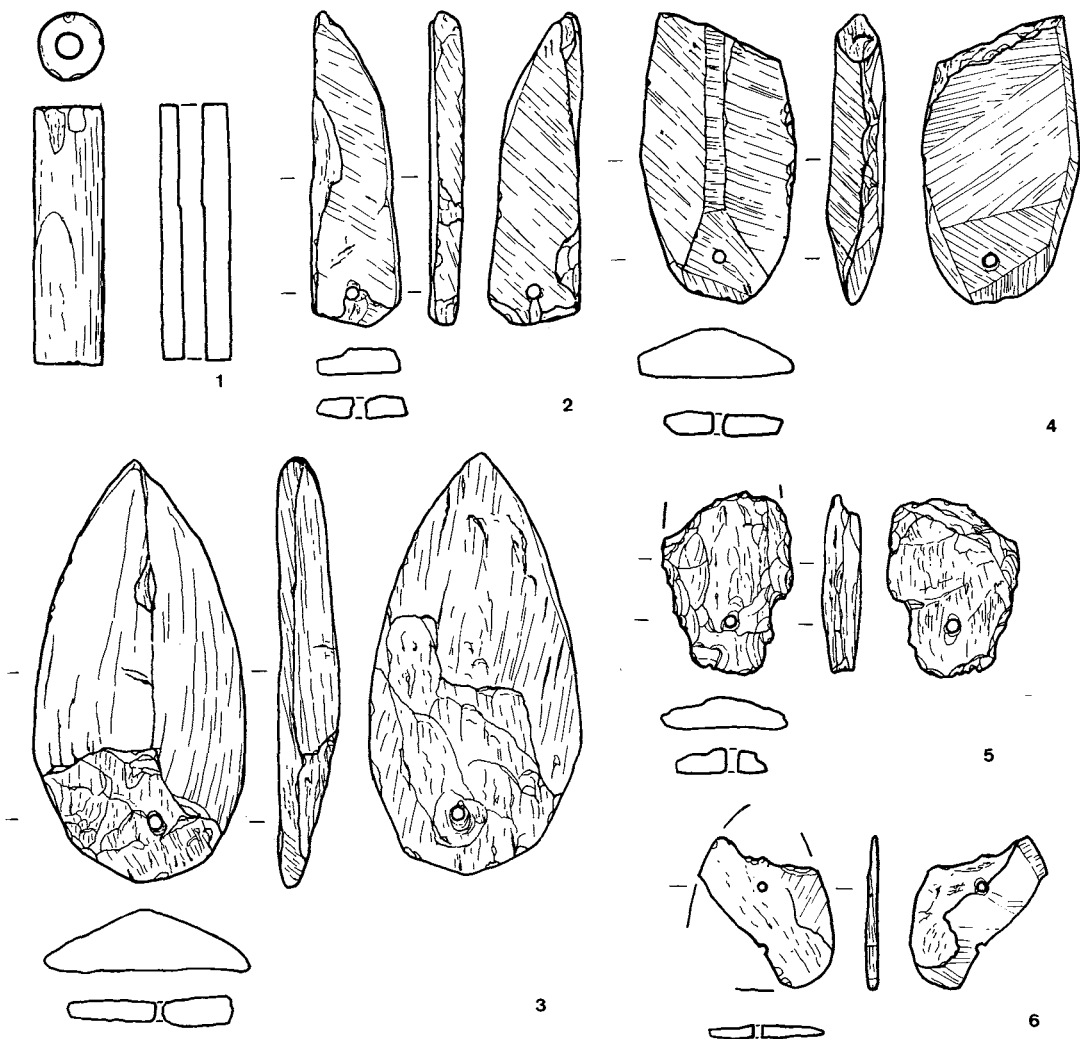
第1類は厚さが径の $\frac{1}{2}$ 未満のもので、No.12～24がこれにあたる。このうちNo.12・13・20は径に比してかなり薄手で、特にNo.12は厚さ0.8mmと、全白玉のうちで唯一1mmに満たない製品である。

第2類はNo.25～31で、厚さが径の $\frac{1}{2}$ 以上を測るものである。このうち、No.28は上下両面とも割れ口のある欠損品で、実際の厚さは3.5mm以上と考えられる。

側面に明確な稜をもつ形態のものを第3類とし、No.32～42が該当する。稜の位置が側面の中心とは限らないが、擦痕が稜の両端にはっきりと認められる。なお、稜については、整形の目的として形成される場合、又、両端の角を削るのを目的として行った結果生じる場合の2つが考えられるが、残念ながらこれを正確に読みとることは出来ない。

1～3類共に、色調は全体的に暗緑色ないし黒色であるが、No.12は比較的白色に近く、No.23は半透明の乳白色を呈しており、これらは滑石としての純度が高いものと考えられる。また、全白玉の平均値は、径4.5mm・厚さ2.2mm・孔径1.7mm、重量はNo.22・27・28・30・32・36・38・39・40の9個が0.1g、No.24・42の2個が0.2gで、それ以外の製品については0.1g未満で計測不可能であった。





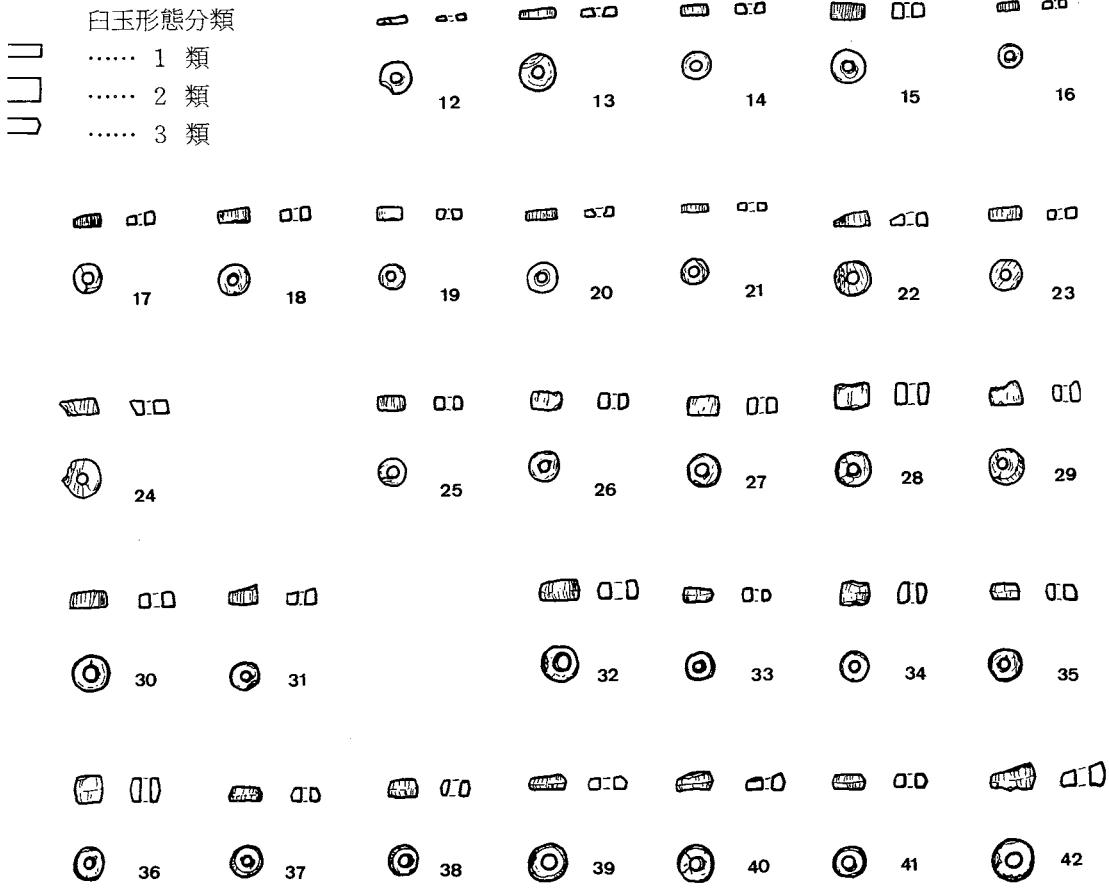
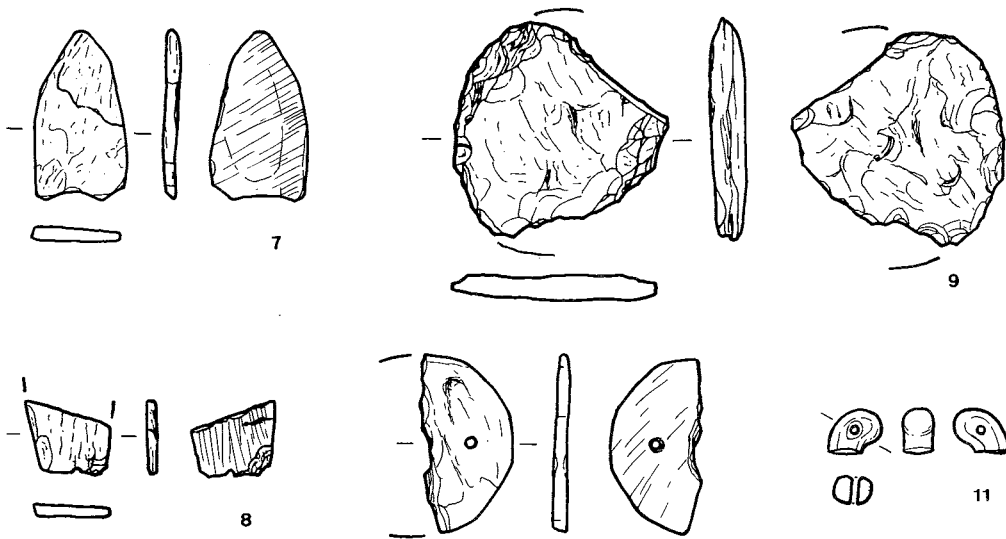
図一七 入山峠祭祀遺跡表採物実測図

刀子、剣、円板及び白玉は全製品共滑石がその原料となっている訳であるが、この産地については、南接する甘楽郡・多野郡が最近地（約40km）としてその可能性を指摘されている（山崎義男 1957）しかし、現状では推定の域を脱し得ず、例えば石製模造品の出土遺跡である神坂峠・雨境峠・瓜生坂等の関連遺跡の様相、及び石材の地質学的研究の成果をふまえて考えてゆかなければならない課題であろう。（田口）

註1. 「白玉」の名称は、江戸時代からの用語で、茶臼に似ていることからこう呼ばれた。（小林行雄 1979）

参考文献

- 水野清一・小林行雄編 『図解考古学辞典』 東京創元社 1979
- 軽井沢町教育委員会 『入山峠』 1983
- 子持村教育委員会 『中ノ峯古墳発掘調査報告書』 1980
- 長野県史刊行会 『長野県史〈考古資料編〉』 1983
- 山崎義男 『上信国境「入山峠」祭祀遺跡について』 考古学雑誌 1957
- 小野真一 『祭祀遺跡』 ニューサイエンス社 1982



図一八 入山峠祭祀遺跡表採遺物実測図  
 (1~5. 9. 佐藤要作氏、ほか、佐藤熊太郎氏)

No	遺物名	材質	長さ	巾	厚さ	径	孔径	重量	形態	穿孔形態
1	管玉	緑色岩	35.2	/	/	9.1	3.5	5.3	/	A
2	刀子	滑石	43.0	11.2	3.8	/	1.9	3.7	/	B
3	剣	〃	58.0	28.0	7.6	/	2.0	15.2	ア	A
4	〃	〃	(40.5)	21.4	7.2	/	2.0	8.1	ア	B
5	〃	〃	(24.5)	(17.4)	(5.0)	/	1.8	2.9	ア	A
6	〃	〃	(21.0)	(15.7)	2.0	/	1.6	0.7	イ	A
7	〃	〃	23.0	12.4	1.5	/	/	1.1	イ	/
8	〃	〃	(9.4)	10.9	1.8	/	1.5	0.3	イ	B
9	円板	〃	/	/	3.8	(29.1)	/	4.2	/	/
10	〃	〃	/	/	2.2	(24.0)	1.5	0.9	/	B
11	勾玉	ガラス	(8.4)	/	/	4.5	1.2	0.3	/	A
12	白玉	滑石	/	/	0.8	4.3	1.8		1	A
13	〃	〃	/	/	1.3	5.0	1.8		1	A
14	〃	〃	/	/	1.6	4.0	1.4		1	A
15	〃	〃	/	/	2.1	4.5	1.7		1	A
16	〃	〃	/	/	1.4	3.4	1.3		1	B
17	〃	〃	/	/	1.9	4.1	1.7		1	A
18	〃	〃	/	/	1.8	4.2	1.5		1	B
19	〃	〃	/	/	1.7	3.5	1.5		1	A
20	〃	〃	/	/	1.0	4.3	1.8		1	A
21	〃	〃	/	/	1.3	3.8	1.2		1	B
22	〃	〃	/	/	2.1	4.8	1.9	0.1	1	B
23	〃	〃	/	/	2.0	4.6	1.9		1	B
24	〃	〃	/	/	2.2	5.7	1.4	0.2	1	B
25	〃	〃	/	/	2.0	3.8	1.5		2	B
26	〃	〃	/	/	2.4	4.3	1.8		2	B
27	〃	〃	/	/	2.5	4.3	2.0	0.1	2	A
28	〃	〃	/	/	(3.5)	4.9	2.0	0.1	2	A
29	〃	〃	/	/	3.5	4.8	1.9		2	B
30	〃	〃	/	/	2.7	5.1	2.0	0.1	2	B
31	〃	〃	/	/	2.5	3.9	1.6		2	B
32	〃	〃	/	/	3.5	5.2	2.1	0.1	3	B
33	〃	〃	/	/	1.7	4.0	1.5		3	B
34	〃	〃	/	/	2.6	3.9	1.6		3	B
35	〃	〃	/	/	2.2	4.5	1.8		3	B
36	〃	〃	/	/	3.7	4.6	2.0	0.1	3	B
37	〃	〃	/	/	2.2	4.7	1.5		3	B
38	〃	〃	/	/	2.5	4.5	1.9	0.1	3	A
39	〃	〃	/	/	2.0	5.5	2.0	0.1	3	B
40	〃	〃	/	/	2.9	5.4	2.0	0.1	3	B
41	〃	〃	/	/	2.1	4.4	1.8		3	B
42	〃	〃	/	/	3.5	6.0	2.1	0.2	3	B

表一 2 石製模造品観察表

○単位は、mm・g

○（ ）は残存部の数値

○穿孔形態 A一両面穿孔・B一片面穿孔

## Ⅳ ま と め

今回の調査及びこれにかかわる問題点について、若干の考察を加えてまとめたい。

調査は鉄塔建設予定地の、わずかに 100㎡を確認したものであるが、遺物・遺構などの人間の手にかかる跡を検出するには至らなかった。この結果により入山峠祭祀遺跡の範囲の問題についても少しふれていきたい。

入山峠における調査は、今回を含め 4 回行われている。

① 1955年に、現在町道となっている入山峠の改修工事が行われることとなり、これに伴い山崎義男により一部について調査が行われた。(山崎義男 1957) ここでは 6ヶ所について調査がなされ、白玉・有孔円板・管玉・勾玉・丸玉・刀子・剣形などの石製模造品や、須恵器、銅銭、キセルなどが出土している。また、古道北側の馬頭観世音碑の周囲において 2ヶ所の掘り下げを試みたが、遺物等の検出はできなかった。この結果、遺跡は積石のあった A 地点、及び B 地点を主体とした約 20㎡程に限定されるらしく、特に A 地点については後世までその主要部として機能していた可能性が考えられた。

②この後、国道 18 号線碓氷バイパス建設計画にもとづき、1968年に長野県教育委員会により確認調査が行われている。ここでも、管玉・勾玉・白玉・双孔円板・無孔円板・剣形の石製模造品や土師器片などが検出されている。

③翌 1969年、大場磐雄を団長として調査が行われ、多くの遺物を検出し得た。管玉・水晶製 棗玉・ガラス製小玉・白玉・有孔円板・剣形・刀子形の石製模造品のほか、S 字状口縁台付甕を含む土師器類が検出されている。また、これらの遺物の出土状態から遺物量の多い地区を中心として、いくつかのグループに分けてとらえられる可能性があることが示された。(梶山林継ほか 1983) また、1955年の調査結果等も考えあわせ、遺跡の中心が峠頂上部東側の現町道あたりにあると考えられ、(梶山林継 1982 a) 遺跡の範囲については、調査区のほぼ全域と、東側では 1955年調査部分を含めた崖ぎわまでとし、北側はやはり馬頭観世音碑のあたりまでと想定している。(梶山林継 1982 b)

遺跡の分布状況については、以上のほか今回の調査結果、入山地区の人々が表採した場所なども考え合わせると、ほぼ前記のとおり範囲に収まるであろうと考えられる。しかし、古道北側(馬頭観世音碑の周囲も含め)についての調査資料が不足していることから、今後の成果にゆだねるところが大きい。

出土遺物等については、各種石製模造品においては検出比率が①・③ともほぼ同じとなる。これらの遺物の石材については、ほとんどが滑石を用いたものであり、更に未製品、原材等が多く検出されているため、原地で製作され捧げられたものとも考えられている。(山崎義男 1957)

次に石製模造品以外の遺物についてみると①・②・③の各調査とも土器類が検出されている。ここでは①を中心として、特徴的な遺物について見ていきたい。<sup>(註 1)</sup> まず縄文晩期後葉の尾張・三河地域を主体とする五貫森式土器の破片がある。<sup>(註 2)</sup> 弥生時代では後期の櫛描波状文・簾状文が施された土器片が検出されている。土師器では、甕・高坏・坏が確認できる。甕には平底と脚台付の 2 種が見ら

れ、脚台付にも単口縁とS字状口縁とがあり全体に小破片である。なかでもS字状口縁台付甕（以下、S字甕とする）については、入山峠のほかに神坂峠の祭祀遺跡からも出土している。このS字甕については、口縁形態等から2種確認できるが、おおよそS字甕編年（田口一郎 1981）のⅣないしⅤ期に該当すると思われるが、小破片のみによるので判断しがたい。<sup>(註3)</sup>また、胴部の肩部横線はないものと思われるが、総て細片で観察は困難である。頸部・胴部とも内面に刷毛目は認められない。しかし、③の調査では肩部横線のあるものも確認できる。

次に須恵器については、坏・蓋がある。このうち坏については猿投窯系の製品でIG78の時期に比定されているものである。

土器の他に、銅銭では皇宗通宝（北宋）、永楽通宝（明）、紹聖元宝（北宋）、寛永通宝、更にキセルの雁首がある。このうち銅銭については<sup>(註4)</sup>铸造年代等明確化されやすいが、キセルについては研究の遅れ等がありとらえにくい。<sup>(註4)</sup>しかし、その形態から江戸期のキセルと比較して第2類b（古泉弘 1983）にあたと見られ、江戸時代中頃のものと考えよう。

以上の出土遺物の中で、石製模造品のほかで特徴的なS字甕についてふれておく。S字甕は、その出自が東海地方西部地域に求められ、その分布は広範にわたり他地域との該期の併行関係を知るうえで有効な土器であるとされ多くの研究がなされている。入山を中心としてみると、「Ⅳ、位置と環境」で示したとおり、千駄木遺跡では外面に肩部横線を持ち頸部内面に刷毛目を施さないものが出土しており、更に松井田町松井田工業団地遺跡<sup>(註5)</sup>で検出され、安中市旧岩野谷村57号墳の墳丘上で表採<sup>(註6)</sup>されている。長野県側でみると近い所では上田市を中心とした地域などで検出されている。

北関東西部地域では、このS字甕を主体とした石田川式土器の分布が見られるが、古墳時代における峠祭祀の入山峠を中心とした古式土師器のあり方が、この石田川式土器によるものか、あるいは直接西方からの影響によるものか問題となるところである。しかし、入山峠及びその周囲において古い段階のS字甕が現在のところ確認できず、炊飯用具としての日常性の要素が信濃よりも上毛野の側において卓越していることから、石田川式としてのアプローチとも見ることができるとは断定はできない。

現在、入山峠については古代の官道である東山道としての問題が論じられることが多い。<sup>(註7)</sup>現状では律令期以前から、当然道としての機能ははたしていたものと考えられる。ここで入山峠の使用年代について出土遺物等から概観していく。まず縄文時代の石器があることから、該期にはすでに峠道として機能していたものと考えられる。また、周囲では仁田・暮井遺跡など多くの遺跡地が確認でき、軽井沢町でも数は少ないものの長倉小谷ヶ沢や茂沢南石堂遺跡（上野佳也ほか 1983）<sup>(註8)</sup>などがある。更に、搬入品と思われる五貫森式土器が出土していることも、広範な交通のあり方を示すものかもしれない。

弥生時代には中部高地型櫛描文として中部高地の箱清水式・北関東西部に樽式が分布するが、南関東に分布する同系の岩鼻式・朝光寺原式をも含めて、入山峠を中心とした地域の重要性が指適されよう。

古墳時代では、前期において遺物量が卓越しており、該期が祭祀を伴う時期の中心を成しているとも考えられるとともに、その安定した祭祀形態の開始の時期ともいえるようである。そして、こ

れに伴って峠道としての交通量も増加したようにも考えられる。

この後は律令期も含めて遺物量の減少傾向が窺えるが、9世紀中頃とされる須恵器や銅銭などの出土から近世までの連続性が見られる。また、遺物の減少事象のみをもって峠道利用の衰退とするにはいささか疑問もあり、これらの事象は社会的背景に起因するところの峠祭祀の衰退によることも考えられる。ここでは遺物量の減少と交通量の減少を、必ずしも同一視点からとらえる必然性はないであろう。

入山峠の祭祀形態を見ていくうえで、時間的問題については出土遺物等を判断材料として考えられるが、祭祀を行う「人」と捧げる「物」と、その「対象」となるものとの3者における位置関係が、遺跡の範囲とともに空間的問題として残っている。入山峠の祭祀については、㊸危険を伴う山路に行く峠での荒ぶる神に対する「手向(たむけ)」という性格と、㊹墳火により幾度もの災害をもたらした浅間山の偉容を望見できることから、これを神体山とした信仰としての性格との2種類の可能性が考えられる。これを関連遺跡で見ると、美濃・信濃境にある神坂(みさか)峠(大場磐雄ほか 1969)では㊸としてとらえられ、また雨境(あまざかい)峠(桐原 健 1982)では入山峠と同様に蓼科山が印象的に見られ㊸㊹ともに考えられる。また、この2種があるとすれば、そこに時間差が見出せる可能性もあろう。更に、峠神・神体山という異なる対象において、捧げられた遺物を仲介とした人間との位置関係が異なってくることは当然考えられることであり、出土した遺物の年代、組成とも合わせて考えてゆかねばならない。また、上・信国境の峠という観点から、境の神としての祭祀のあり方も検討される必要がある。直接結びつけることはできないが、民俗例として、秋田県能代地方の「鍾馗様(しょうきさま)」にみられる邪霊悪鬼をさける思想などは示唆するところがある<sup>(註9)</sup>。

以上、今回及び過去に行われた調査結果を踏まえたうえで、入山峠における祭祀のあり方等雑多に概観してきた。日常生活の象徴たる集落遺跡などとは異なる峠の祭祀遺跡という性質及び立地の特殊性から、この遺跡の示す意味づけを明確化するのは困難なところである。問題点として掲げた点については今後の研究成果に委ねるところが多いが、遺跡地の現状を見ると既に範囲推定地のほとんどが道路工事等により変更されており、わずかに群馬県側において町道部分を含めて残存するのみである。

また、遺跡に関連して一つの民俗例がある。松井田町入山地区では、入山峠の白玉を糸などに通し、馬のお守りとして「タテゴ」につけて安全を祈るという風習があった。このため遺跡で多くの石製模造品が掘り出され、現在も多くの住民の間で所有されるところと考えられる。今回紹介した表採遺物の一部もこの用に供されたものであり、今後これらの遺物についても調査を行うことにより、研究の一資料として提示することができよう。

入山峠を中心とした上信国境の峠に対する見方は、歴史上の位置としては生活上の道の他に、中部高地、ひいては西方と関東との接点としての重要性が認められるところであり、特に北関東西部への古墳文化の伝播及び、律令期(それ以前も含めて)東山道の問題等、多くの問題を含んでいる。今後の研究に期待されるところは実に多いところである。

## 補 註

1. 山崎義男調査による入山峠出土品は、現在は山崎コレクションとして群馬県立歴史博物館所蔵となっており、今回この報告書作成にあたり熟覧させていただいた。
2. この出土破片については搬入品と見られる。
3. 調査①・③ともに口縁上半が短く直立ぎみに立ちあがる小型のものと、外反して丸く終わるものが見られる。
4. このような近世以降の遺物については、現段階では明確化することは困難といえる。今後の資料の蓄積と研究の成果に期待されるところである。
5. 平安時代を中心とした集落遺跡であるが、石田川期の住居址が検出されており、現在整理中である。
6. 竪穴式石室を主体部とする前期の円墳で、墳丘上より胴部破片を採集した。周辺部における集落の広がりが見られる。
7. 特に入山峠を中心とした地域の研究者により論じられている。その論点は、東山道における「碓氷坂」は入山峠・碓氷峠のどちらであるかが重要なところとなっている。
8. 報文中で「茂沢タイプ」（西田泰民「第3章 遺物」）とされた第5群の土器に相当する遺物が、松井田町国衙朝日遺跡で多量に出土しており、現在整理中である。
9. 藁でつくり村境に置く。村の入口に立つ守り神とともに無病息災・村人の旅の安全も願う。同様の事例は韓国でも「チャンスン」として見られ、8世紀中頃には文献に記されているという。

## 引用・参考文献

- 愛知考古学談話会『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題 — 縄文から弥生 — 資料編Ⅰ』1985年。
- 伊藤久嗣『納所遺跡』三重県教育委員会1980年。
- 上野佳也 編『長野県北佐久郡軽井沢町文化財調査報告書 軽井沢町茂沢南石堂遺跡 総集編』軽井沢町教育委員会1983年。
- 上原富次「第二部歴史編第一章原始から古代へ」（『松井田町誌』松井田町誌編さん委員会1985年）。
- 大沢和夫「神坂峠遺跡」（『長野県史 考古資料編全1巻(3)主要遺跡(中・南信)』長野県史刊行会1983年）。
- 小野真一『考古学ライブラリー10 祭祀遺跡』ニュー・サイエンス社1982年。
- 大場磐雄・椋山林継 編『神坂峠』阿智村教育委員会1969年。
- 神村 透「杉の木平遺跡」（『長野県史 考古資料編全1巻(3)主要遺跡(中・南信)』長野県史刊行会1983年）。
- 河津町教育委員会『河津郷姫宮遺跡報告書』1979年。
- 桐原 健「雨境峠遺跡群」（『長野県史 考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会1982年）。

群馬県教育委員会『群馬県歴史の道調査報告書第16集 東山道』1983年。

古泉 弘ほか『江戸一都立一橋高校地点発掘調査報告一』都立一橋高校内遺跡調査団1985年。

坂詰秀一『図録 歴史考古学の基礎知識』柏書房1980年。

塩入秀敏「丸子町原沢遺跡出土の古式土師器」（『上小考古』No.10 上小考古学会1982年）。

梶山林継 a 「入山峠遺跡」（『長野県史 考古資料編全1巻（2）主要遺跡（北・東信）』長野県史刊行会1982年）。

梶山林継 b 「神坂峠」（『神道考古学講座』第3巻原始神道期2 雄山閣出版1982年）。

梶山林継 編『入山峠』軽井沢町教育委員会1983年。

田口一郎「XI遺物の検討（4）S字状口縁台付甕の分類と編年」（『高崎市文化財調査報告書第22集 元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会1981年）。

田島桂男『日本の古代遺跡17 群馬西部』保育社1984年

松井田町教育委員会『群馬県碓氷郡松井田町千駄木岩陰遺跡発掘調査概報』1974年。

水澤祝彦「碓氷川水系における弥生時代後期から古墳時代前期の様相」（『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所1984年）。

宮家 準『教育社歴史新書〈日本史〉174 修験道 — 山伏の歴史と思想 —』教育社1985年。

宮本馨太郎『図録 民具の基礎知識』柏書房1980年。

山崎義男「上信国境『入山峠』祭祀遺跡に就いて（附官道「東山道」碓氷峠<sup>ウスイ</sup>の検討）」（『考古学雑誌』第43巻第1号 日本考古学会 1957年）。





調査現場付近より  
北西約15kmに、銀嶺  
浅間山の偉容を望む。

写一 1



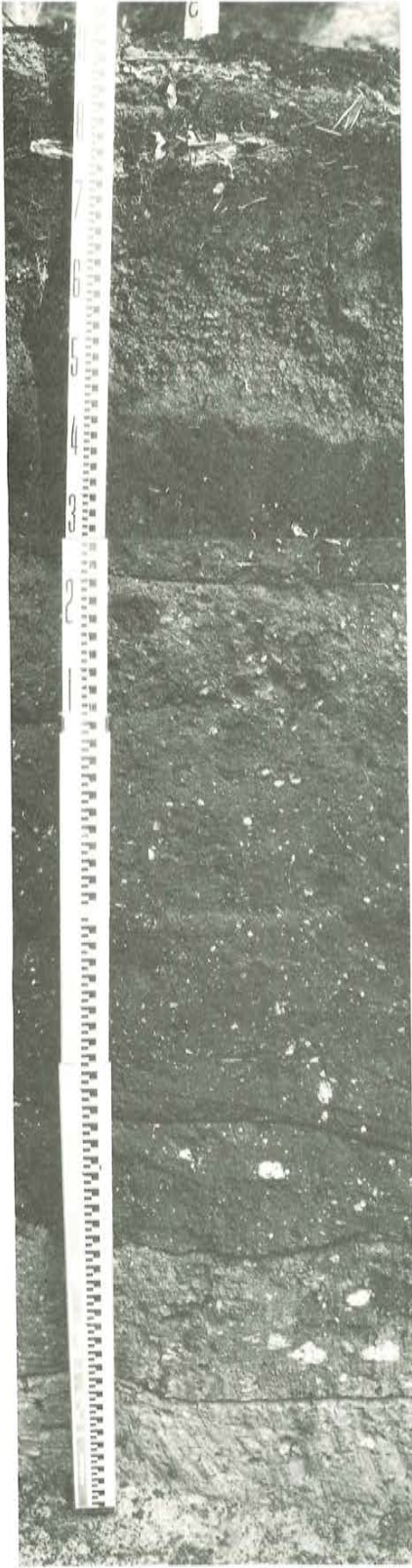
発掘前調査区全景。  
雪・枯葉・枯枝等に  
全面を覆われていた  
調査はこれらの排除  
から始まった。

写一 2

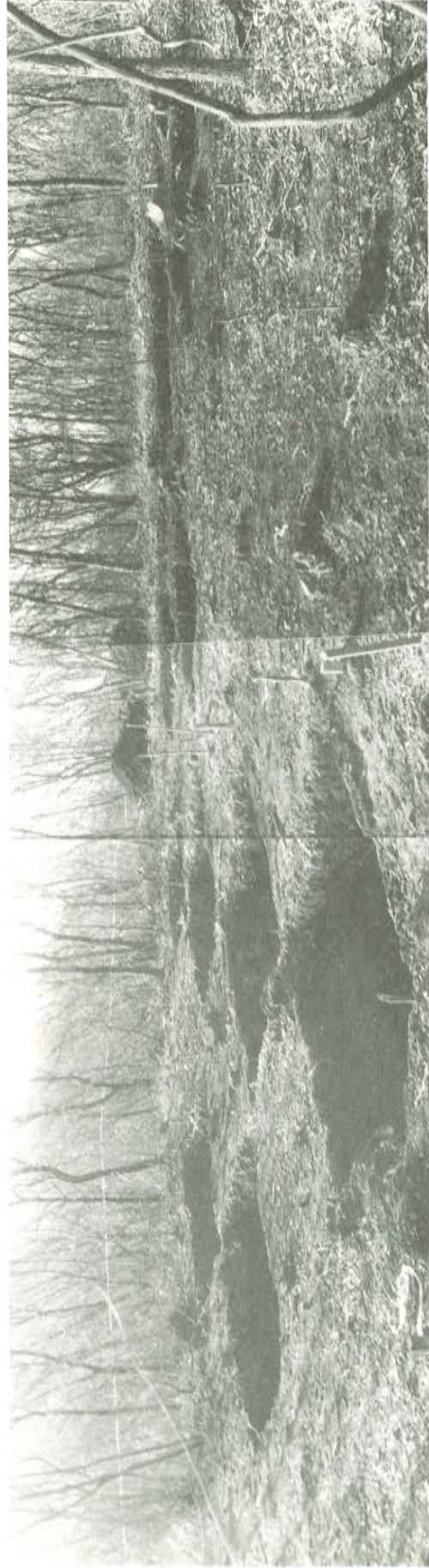


凍土と寒気、  
作業はそれらの厳し  
い条件の中で進めら  
れた。

写一 3

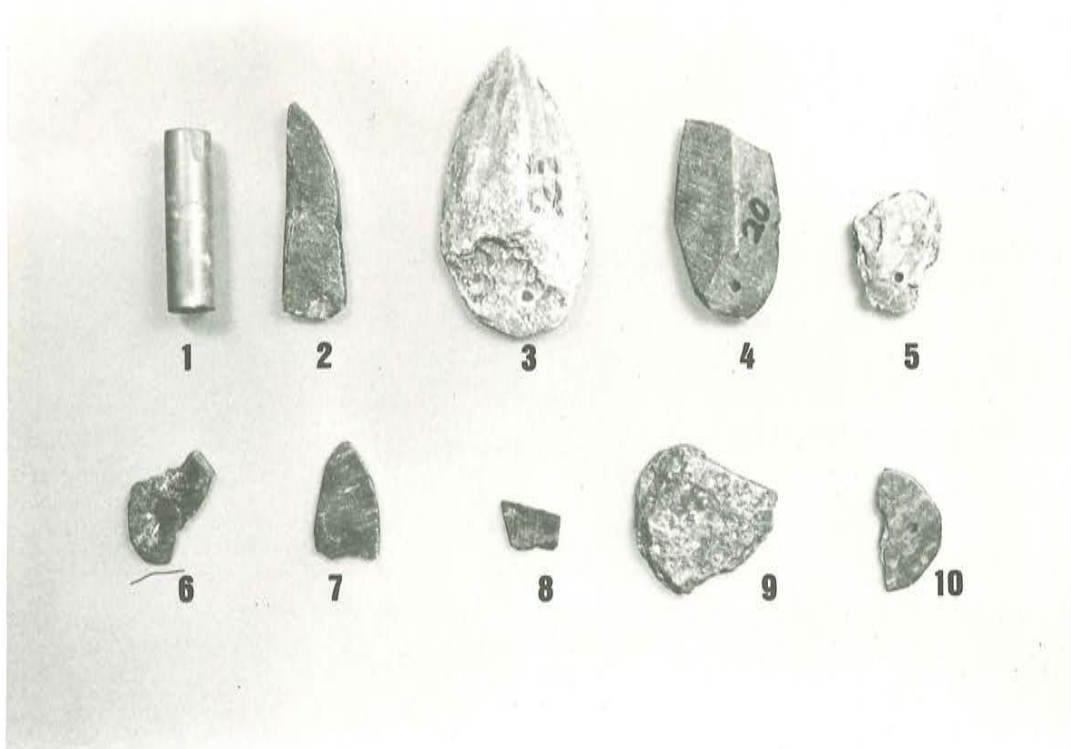


写-5 土層写真

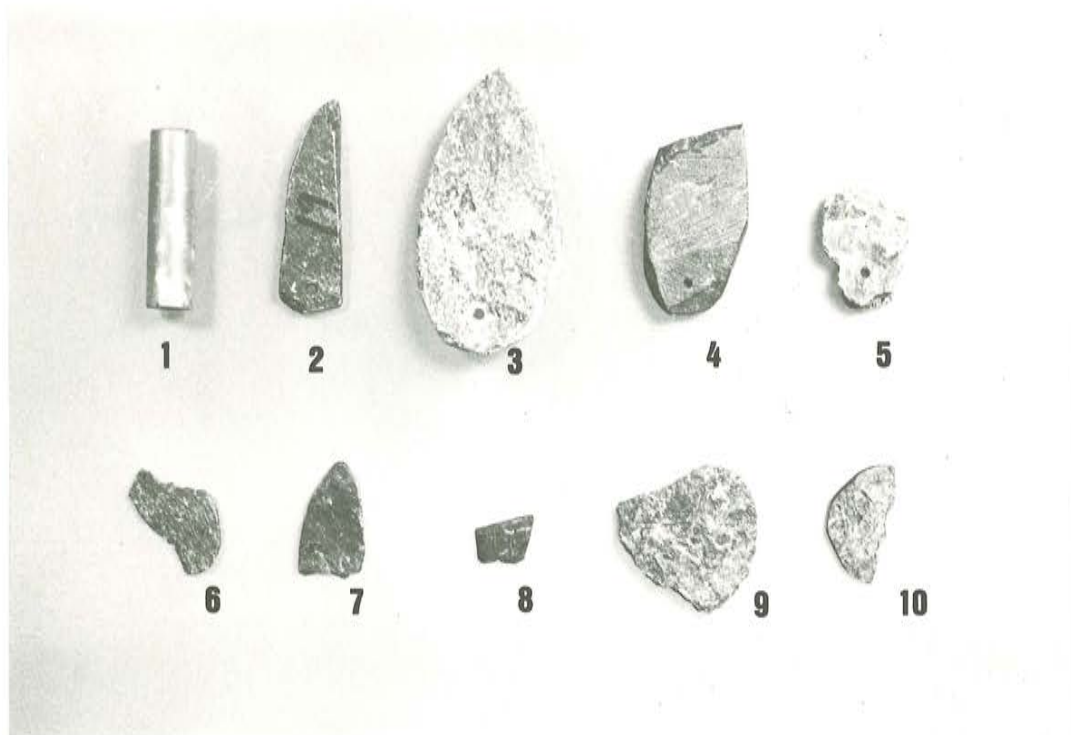


写-4 調査区全景(発掘後)

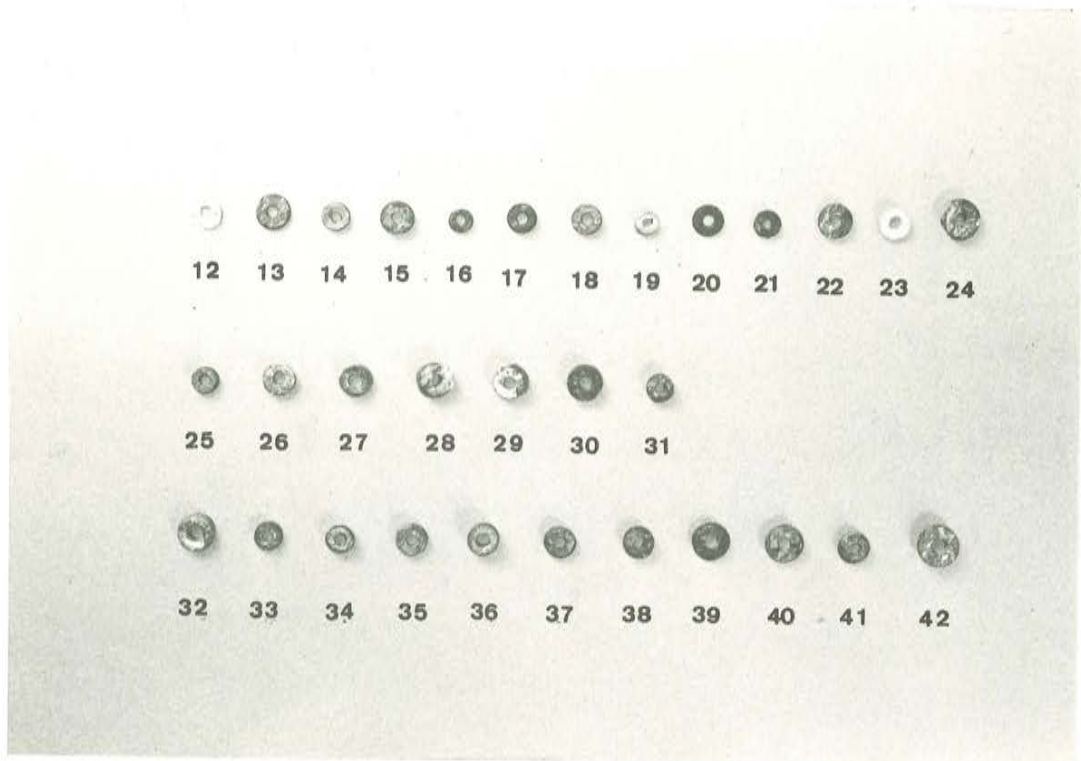




写一6 入山峠祭祀遺跡表探遺物(表)



写一7 入山峠祭祀遺跡表探遺物(裏)



写一8 入山峠祭祀遺跡表採遺物(白玉)



写一9 刎石山表採遺物



写一10 作業風景



写一11

発掘調査参加者は次のとおりである（敬称略）

土屋道江・

内田力雄・小板橋満・佐藤今朝吉・内田和子・神戸直子・神戸フミ江

小板橋みち子・小板橋よ志・藤巻ひろ子・前村小夜子・山本初子。

厳寒の中、御協力 ありがとうございました。

松井田町文化財調査報告書第1集

入 山 峠

印 刷 昭和61年4月19日

発 行 昭和61年4月21日

編 集 者 松井田町教育委員会

社会教育課埋蔵文化財保護係

発 行 者 松井田町教育委員会

印 刷 所 碓氷印刷株式会社